

統語的アスペクト補助動詞が主観性を帯びるとき

板東美智子 (滋賀大学)・日高俊夫 (九州国際大学)

bando@edu.shiga-u.ac.jp; t-hidaka@isb.kiu.ac.jp

1 はじめに

本発表で扱う現象：

- 日本語のアスペクト補助動詞：

「かける」、「だす」、「始める」、「続ける」、「過ぎる」、「まわる」、「まくる」等は、統語的に補部にVPをとり、そのVP内の主語が主節の主語になる「繰り上げ動詞 (raising verbs)」として分類されている。(Nishigauchi (1993), 影山 (1993), Kishimoto (1996), Igarashi and Gunji (1998), 由本 (2005), 岸本 (2013), 等)
- 本発表では、特に、出来事の開始アスペクトにまつわる「かける」を扱う。¹その他、開始アスペクトを表す「-だす」「-始める」も「-かける」との比較において観察する。
- 「V-かける」は「動作開始の寸前」と「動作開始の直後」の曖昧生がある。例えば、金田一 (1976) の「死にかける (将現態)」と「読みかける (始動態)」を始めとして「-かける」の二義性は上記の先行研究でも指摘されてきている。しかし、付加するV₁によってはどちらかの意味しか生じない例もある。

- (1) a. 氷が解けかけた。(出来事開始の直後)
b. 氷を解かしかけた。(出来事開始寸前か開始直後で曖昧)
- (2) a. 障子が破れかけた。(出来事開始の直後)
b. 障子を破りかけた。((1b)と同様、曖昧)
- (3) ジョン {?が/は} 死にかけた。(出来事開始寸前)

(1a)では、ほんの少しでも氷が水になっている部分がないと不可、同様に、(2a)では、障子のどこかが少しでも破れて始めていなければ言えない。一方、(1b)では、全く解けていない氷を前にして発言可能であるし、(2b)もまっさらな貼りたての障子の前でも言える。これは以下の出来事開始のキャンセル可否でも観察できる。

- (4) a.*氷が解けかけたが、結局、解けなかった。
b. 氷を解かしかけたが、結局、解かさなかった。
- (5) a.*障子が破れかけたが、結局、破れなかった。
b. 障子を破りかけたが、結局、破らなかった。

(3)は(1a)、(2a)と反対に死ぬ寸前の状況である。

本発表の目的：

- 出来事開始のアスペクト補助動詞がどのようなアスペクトのV₁と共起できるのかを観察する。
- 特に、補助動詞「-かける」がV₁の表す出来事の一時点(開始時点およびその直後)を切り取る時、アスペクト補助動詞として機能している。
- 一方、「-かける」がV₁が表す出来事の一部を切り取っていないとき(出来事開始寸前)、その「V₁-かけた」構文は話者の主観的判断を帯びる。
- 同じ補助動詞の「-かけ(る/た)」が客観的なアスペクト補助動詞として機能するか、主観的な話者の判断かの使い分けを、補助動詞 *-kake* の語彙登録と、時制/完了の *-ru/-ta*、あるいは、終助詞 *-ta* との組み合わせで観察する。

2 アスペクト補助動詞の定義と分類

2.1 国語学

- 寺村 (1969: 46-47)

¹「-かける」はその本動詞「(知らない人に声を)かける」の意味を残した「誘いかける」「笑いかける」のような語彙的複合語も形成するが、今回は分析の対象としていない。

(6) 始動、終結、継続を表すもの

～ハジメル、～ダス、～カケル、～ツヅケル、
～ツヅク、～オエル、～オ瓦尔、～ヤム

→ この項の～カケルは例えば「出発シカケル」「言イカケル」のように、或る動作がまさに始まろうとする（或はした直後）の状態をいうので、しばしば「将然態」をあらわすといわれる。或る動作が始まって、直後に何ものか（何ごとか）によって中止させられるという場合が多いようである。

- 金田一 (1976: 50-52): 「かける」の動作相のAspect - 「始動態」と「将現態」 -

- (7) a. 「始動態」: ある動作・作用が始まることを表す。「読みかける」
b. 「将現態」: ... 寸前の状態に達する。「死にかける」「本を読みかけてやめた」

- 姫野 (1979: 53): 「継続動詞+かける」の観察

- (8) a. 「だって学校が...。」そう いいかける のといっしょに、なみだが出てきた。(佐多稲子「キャラメル工場から」)
b. 私はそのあと、(そんならあの銀座のマグムとも、渋谷の人とも手を切ってください)と、いいかけた のだが、あわててその言葉を飲み込んでしまった。

→ その動作の持続部分の始まりに目を付けると、始動態になり、前の状態からその動作に入るという変化の瞬間性(「言う」の場合は、「沈黙→発話」の変化)が強調されると、将現態になると言えはしまいか。ほとんどの「継続動詞+かける」は、本来的にこの二つの態をあわせもっていると考えられよう。

2.2 生成文法の意味的・形態的・統語的研究

Aspect補助動詞は自動詞あるいは他動詞の V₁ と複合して「統語的複合動詞」を形成する。

- (i) 意味的には、V₁ が表す出来事全体のある特定のAspect部分を切り出す。

(ii) 統語的には、補部に VP (あるいは vP) の埋め込み構造をもつ。

(iii) Aspect補助動詞のうち繰り上げ動詞に分類されるものは主語名詞に制限がない。

統語的複合動詞の下位分類(岸本 2013: 146):

- (9) a. 上昇動詞 (非対格型): (ex) かける、だす、過ぎる、まわる、まくる
b. コントロール動詞 (非能格型): (ex) 損ねる、そびれる、終わる、損なう
c. コントロール動詞 (他動詞型): (ex) 終える、直す、尽くす
d. コントロール構造と上昇構造のどちらをとってもよいタイプ: (ex) 続ける、始める

2.3 V₁ Aspectとの組み合わせ

V ₁ のAspect	V ₁ の例
State	(富士山が) そびえる
Activity	歩く
Achievement	(電車が駅に) 着く
Achievement	驚く (心理動詞)
Achievement	死ぬ (瞬間動詞)
Achievement	(氷が) 解ける
Accomplishment	(ビルを) 壊す

-かける	-だす	-始める
*そびえかける	*そびえだす	*そびえ始める
歩きかける	歩きだす	歩き始める
着きかける	*着きだす	*着き始める
驚きかける	*驚きだす	*驚き始める
死にかける	*死にだす	*死に始める
解けかける	解けだす	解け始める
壊しかける	壊しだす	壊し始める

- 出来事開始のAspect補助動詞は開始時点がない状態動詞 (State) には付加しない。
- 「-かける」は活動動詞 (Activity) に付加すると、最初の活動の開始寸前か最初の活動の開始直後の曖昧性がある。
- 「-かける」が瞬間動詞 (Achievement) の、

- Theme 主語をもつ VP に付加すると出来事開始直後 (/?曖昧) である。
- Experiencer 主語の心理動詞 VP に付加すると曖昧である。
- Experiencer 主語の瞬間動詞 VP に付加すると開始寸前の意味である。
- 「-かける」「-だす」「-始める」が漸減/漸増の到達動詞 (Achievement with Incremental Theme) に付加すると出来事の開始直後の意味である。
- 「-かける」が達成動詞 (Accomplishment) に付加すると曖昧である。「-だす」「-始める」は開始直後の意味である。

3 V₁-*kake* と主観性

3.1 -*kake* の語彙登録

「-かける」が他の開始アスペクト補助動詞と異なる点:

- (11) a. 初回最短承認時点 (The Minimal Approved Point: MAP): 動詞句が描く出来事が最初に生じたと承認できる最短の時点
- b. 「V₁-かける」は MAP の寸前あるいは直後を描く。(板東・日高 2015)

「-かける」に二種類の語彙登録を仮定する:

- (12)
$$\left[\begin{array}{l} \text{-kake}_1 \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG} = \boxed{\text{[vp/VP]}} \\ \text{Truth-conditional section} \\ \text{FORMAL} = \text{kake}(e) = p, \\ \text{where } \text{MAP}(e) <_{\circ\infty} p, p \in \boxed{\text{[]}} \\ \text{CONST} = \phi \\ \text{Non-truth-conditional section} \\ \text{TELIC} = \text{MAP} <_{\circ\infty} p < f \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \end{array} \right]$$
- (13)
$$\left[\begin{array}{l} \text{-kake}_2 \\ \text{ARGSTR} = \left[\begin{array}{l} \text{ARG} = \boxed{\text{[TP]}} \\ \text{Truth-conditional section} \\ \text{FORMAL} = \text{kake}(e) = p, \\ \text{where } p <_{\infty} \text{MAP}(e), p \notin \boxed{\text{[]}} \\ \text{CONST} = \text{be_about_to} \\ \text{Non-truth-conditional section} \\ \text{TELIC} = \text{MAP} \end{array} \right] \\ \text{QUALIA} = \end{array} \right]$$

3.2 二種類の -*ta*

金田一 (1953): 主観的「た/だ」とふつうの「た/だ」

- (14) 私は、「た」の用法の中に、主観的表現に用いられるものがあることは認める。がそれは「た」としては特殊な、いわば、非助動詞的な用法だと思う。代表的な用法は、完了や過去を表すことだと思う。(金田一 (下) 1953: 15(149))
- (15) a. おい、ちょっと待った。
b. さあ、どいた、どいた。(a, b 金田一 1953 上: 4)
c. 「しまった!」「しめた!」「でかした!」など
- (16) A 助動詞のうち、「う」「よう」「まい」「だろう」ある場合の「た」「だ」など、終止形だけしかないものは、話者のその時の心理の主観的表現をするのに用いられるものである
B 助動詞のうち、「ない」「らしい」「ます」「です」ふつうの「た」「だ」など、いろいろの活用形をもつものは、動詞・形容詞と同じく、事態・属性などを客観的に表現するのに用いられるものである
C 主観的表現に用いられる語は、文の末尾以外に立ち得ない。客観的表現に用いられる語は、種々の位置に立ち得る (金田一 (下) 1953: 31(166))

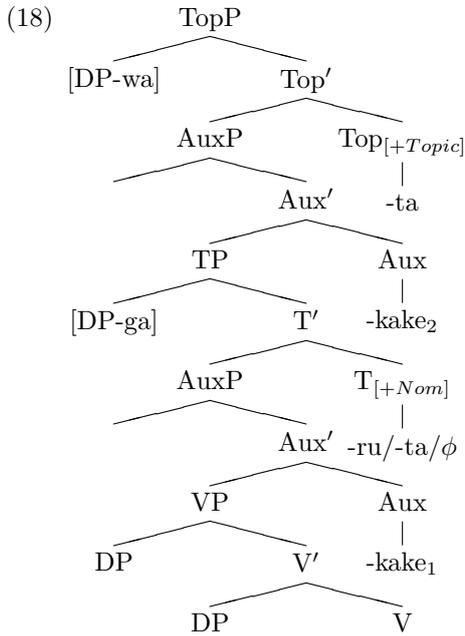
澤田 (1993: 165): 認識構文で二回現れ得る「た」

- (17) a. コスモスが咲いたたかもしれなかった。
b. コスモスが咲いたたようだった。
c. コスモスが咲いたたらしかった。

以上より、本発表では以下のことを仮定する:

- 日本語の Tense head として *-ru*, *-ta* の他に null tense の ϕ を認める。ただし、null tense は主格「が」を照合しない。
- 日本語の Topic head として *-ta* を仮定する。この Topic 主要部は助詞「は」を照合する。
- Agent 主語または Exp 主語があり、かつ、出来事開始キャンセルの文脈や副詞「うっかり」「もう少して」「内心」等が存在する場合、*-kake*₂ が選ばれ、Topic head の *-ta* と接辞する。

- 従って、話者の判断が入ってくる V_1 -*kake* 構文の文末には終助詞 *-ta* しか付かない。



V_1 に非対格自動詞／他動詞交替がある例：

- (19) a. 氷 { が/*は } 解けかけた。
→ *-kake₁* + past tense *-ta*
- b. *pro* 氷を解かしかけた。 → 曖昧
- c. *pro* 氷を解かしかけたが、結局、解かさなかった。
→ *-kake₂* + topic *-ta*
- (20) a. 障子 { が/*は } 破れかけた。
→ *-kake₁* + past tense *-ta*
- b. *pro* 障子を破りかけた。 → 曖昧
- c. *pro* 障子を破りかけたが、やっぱりやめた。
→ *-kake₂* + topic *-ta*

V_1 が瞬間動詞の例：

- (21) 電車 { が/?は } 駅に着きかけた。
→ 電車が駅に着く時点 MAP の前後を観察できるので着く寸前と着いた直後の曖昧性があるが、
-kake₁ + past tense *-ta*
- (22) ジョン { が/?は } 死にかけた。
→ 通常の世界では MAP 以前の時点は観察不可：
-kake₂ + topic *-ta*

4 おわりに

- 出来事の開始を表すアスペクト補助動詞「かける」「だす」「始める」のうち、「 V_1 -かける」が V_1 の MAP を含んで開始直後を切り取る場合は、アスペクト補助動詞と見なせる。
- 「かける」が他の開始アスペクト補助動詞と異なる点に、MAP 指定があり、その直前である出来事開始寸前をみる機能がある。この「かける」は V_1 のアスペクトを切り取っていない。出来事開始をキャンセルして「もう少しで V_1 しそうだ」とか「もう少しで V_1 できそうだ」といった話者の判断を示す読みがある。
- 客観的アスペクト用法と主観的な補助動詞用法の二義性について、二種類の *-kake* と二種類の *-ta* の語彙登録を仮定し、それらを組み合わせることによって説明した。

謝辞:本研究は、JSPS 科学研究費 (基盤研究 C, 課題番号 24520424, 研究代表者 板東美智子) の助成を受けたものです。

参考文献

- 板東美智子・日高俊夫 (2015). 「アスペクト補助動詞「かけ」の意味的機能」 *NLP 2015*. 言語処理学会第 21 回年次大会発表プロシーディングス.
- 姫野昌子 (1979). 「複合動詞「～かかる」と「～かける」」 *日本語学* 校論集, No. 6. 37—61. 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校.
- Igarashi, Yoshiyuki and Takao Gunji (1998). The Temporal System in Japanese. In Gunji, Takao & Kōichi Hashida (Eds.), *Topics in Constraint-Based Grammar of Japanese*. 81—97. Kluwer Academic Publishers.
- 影山太郎 (1993). *文法と語形成*. ひつじ書房.
- Kishimoto, Hideki (1996). Split Intransitivity in Japanese and the Unaccusative Hypothesis, *Language*. Vol. 72, No. 2. 248—286. Linguistic Society of America.
- 岸本秀樹 (2013). 「統語的複合動詞の格と統語特性」影山太郎 (編), *複合動詞研究の最先端一謎の解明に向けて*. 143—183. ひつじ書房.
- 金田一春彦 (1953). 「不変化動詞の本質—主観的表現と客観的表現の別について—」 *国語国文 (下)*. 15(149)—35(159).
- 金田一春彦 (1976). *日本語動詞のアスペクト*. むぎ書房.
- Nishigauchi, Taisuke (1993). Long Distance Passive, In Nobuko Hasegawa (Ed), *Japanese Syntax in Comparative Grammar*. 79—114. Kurocio.
- Pustejovsky, James (1995). *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 澤田治美 (1993). *視点と主観性—日英語助動詞の分析—*. ひつじ書房.
- 寺村秀夫 (1969). 活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト—その (1)—, *日本語・日本文化*. No. 1. 32—48. 大阪外国語大学研究留学生別科.
- 由本陽子 (2005). *複合動詞・派生動詞の意味と統語*. ひつじ書房.